

ヨーロッパ珍道中の思い出

2022年2月 大坪克也

1990年6月、34歳の夏。前職を辞めるに際して溜まった有休を消化すべく、休暇を取って欧州を回った。ロンドンからパリ、TGVでミラノ、コートダジュールを横目に見ながらスペインに入り、最後はパリに戻って帰国という1ヶ月の駆け足バックパッキングだ。途中、面白い出来事もあったので思い出すまま綴る。

ロンドンの初泊のみホテルを予約したが、あとは全て当日。目的地に午前中に着いたらまずは安ペンション探し、という日々。各都市せいぜい2, 3泊。先々で「日本人は忙しい」と言われる始末。Thomas Cookの時刻表と“地球の歩き方”が頼りの道連れだった。

初めてのロンドン。有名どころはひととおり廻った。キューガーデンの美しさに心奪われ、大英博物館では言葉を失った。博物館・美術館などすべて入館無料、しかも展示室のすべてに警備の中年紳士がつく。こんな文明大国相手に戦争などするものではない。宿では意外に気さくな英国紳士と言葉を交わし、不味いと聞く英国料理を味わった。



Kew Gardens の大温室

ドーバーフェリーで知り合ったパリの青年たち、17、8歳か？日本人と見てちょっかい出してくるがなかなか気の良い連中。夜も遅め、バスの後方で騒ぐ彼ら。前の方の女の子が何か叫ぶ。たぶん「うるさい、黙れ！」と言われたのだろう。急にシュンとなって乗客のクスクス笑いが可笑的。

パリには入ったものの、ここは一泊の素通り。旅のメインはミラノ大聖堂とコルドバのモスク訪問だ。知らなかったのだが、この年はFIFAワールドカップのイタリア開催の年。TGV車中も異様な雰囲気だ。Jリーグ誕生前夜の日本の旅行者としては文字どおりの別世界。

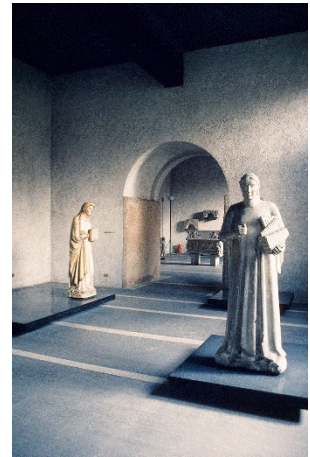
ミラノ着の翌日、大聖堂を訪問。感激しながら聖堂内の席でカメラを構える。ストロボが焚けないので荷物を置いて肘で固定する。その時、膝元にスッと気配を感じたが既に遅し。一瞬のうちにリュックを盗まれていた。間抜けな旅行者をこっそりつけてきた恐らくは子どもの仕業。冷や汗と鳥肌。被害はトラベラーズチェック(T/C)とカメラの交換レンズと小物で、幸いユーレイルパスは無事だった。警察を探して訴えるがイタリア語オンリー。そこへ出入りの業者らしい美しいオルネラ嬢登場。女神に思えた。英語で事態を伝えて被害届を書く。久々の英作文だ。



ミラノ大聖堂内部 / “事件”の瞬間

ミラノ駅の窓口でT/Cの被害届を見せて事情を話すとちょっと太めのおじさんが「OK, No problem」と。ノープロブレムという言葉がこの時ほど頼もしく優しく希望に感じたことはない。

翌日、ベローナへ足を伸ばしてカルロ・スカルパの旅。オリベッティ本社、カステルヴェッキオ美術館を見て心底感動。東京からロミオとジュリエット目当てでベローナを訪れた女性に大聖堂での事件を話すと親切に旅情報やガイド本を分けてくれる。ミラノに戻り、お礼に路上の馬鹿騒ぎを見下ろしながらの夕食。サッカーのミラノ会場でイタリアチームが予選勝利を果たした夜だった。



カステルヴェッキオ美術館

地中海沿岸に行く夜行列車は安い6ベッドのクシエツの上段だ。乗客は少ない。途中乗ってきた陽気な男があった。意外に日本のことを知っていて楽しく語り床についた。が、深夜に誰かが私の荷物をまさぐる気配で目が覚める。奴だ。とっさに「なんしようとか?! きさん(貴様)!」と博多弁で威嚇。彼は床に飛び降り、我も降りて自然に空手の構えをする。やったこともないのに「とりゃー!!」とか言うと、何やら「ゴメンナサイ」みたいなことを言いながら逃げていく。以前、友人がイタリアのどこかの駅のホームで、荷物の引っ張り合いをした時、空手のまねごとをして難を逃れた、というのを思い出した。

すっかり目が冴えてしまう。深夜2時ころか。今度は怪しげな男の二人連れが入ってくる。しかも大男。いずれもワイルドな風貌、というより薄汚い。で一人は足に怪我をしているのか? 映画「真夜中のカウボーイ」のマイアミをめざす二人連れのように。ありや、またやべえ~なあ...、用心していると、なんか優しく話しかけてくる。片言英語が通じて、どうも無賃乗車らしい。何を話したか忘れたが優しくとてもいい人たち。途中、車掌が見回りに来て見咎められ、「次の駅で降りろ」と言われてしまった。可哀そうに。何故か握手をして別れる。なんとも不思議な夜だった。

バルセロナでは最初に駅の事務所へ。念のためAmerican-Expressのチェックにしておいて本当に良かった。ミラノで被害申告した金額分のT/Cをここで受け取れるのだ。旅を遅らすこともなく。国境を超える素晴らしいシステムに感激。

安ホテルを決めると、さっそくガウディ。サグラダ・ファミリアからカサミラ、グエル公園をゆっくりとまわる。

翌日、遅めの午後、モンジュイックの丘、たしか工事中の磯崎新の五輪屋内競技場「パラウ・サン・ジョルディ」を目指すと、いつの間にか工事現場のエリア? にいるらしい。気が付くと近くの旧スタジアムからローリング・ストーンズが流れてくる。ナント! 夜のコンサートへ向けてのリハーサル中だったのだ! 扉の隙間から覗こうとするも姿は見えぬ。それでもミック・ジャ



サグラダ・ファミリア

ガーのルビー・チューズデイを生まれて初めて（最後でもあるが）生で聴いた、どこかサビと一緒に歌った！スゴイ！ラッキー！！

後で表へ回ると開場待ちの人々。私は工事ヤード側へ迷い込んでいたので一人で無料の特等席だったのだ。

うろついていると白バイの警官「ここに入ってはいけない。出なさい」という。「えええ〜！？これ（磯崎）を見るためにはるばる日本から来たのに〜（涙）」と一芝居打つと、じゃ乗れ、と白バイの後ろに乗せてくれて現場をぐるっと回ってくれた。ただの工事現場で大した感動はなかったが、、優しいポリスマン、ごめんなさい m(__)m

バルセロナ3泊で、いよいよコルドバへ。ペンション Hotel Maestre は Google Map で今も確認できる。懐かしい。コルドバのモスク、高校時代からのあこがれの空間に立つ。スペインはヨーロッパとイスラムが争い共存した文化。縞々アーチ列柱空間の中央にはゴシックのカテドラルが「挿入」されている。レコンキスタの象徴だ。



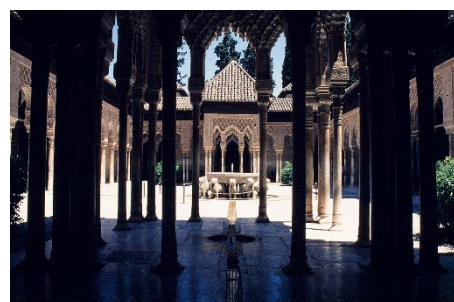
コルドバのペンション/正面2Fの部屋

スペインは中央ヨーロッパ時間圏の最西にあるため実際の時間より時刻表示が2時間ほど進んでいる。だからペンションのパティオでは夜の11時くらい（ホントは9時）まで騒いでいるし、朝9時発のグラナダ行バスに乗るのにまだうす暗いうちに出る。



コルドバのモスク/内部

グラナダ駅で会った石田さんという人に良いペンションを教えてくださいと、たまたまその日は祭りの日で、二人で街の賑わいを楽しむ。アルハンブラ宮殿では数人の日本人と出会った。東京渋谷でデザインをやる村井さんとは座り込んで長いことお話した。大阪阿倍野の竹花老人は、考えてみれば今の私くらいの年齢だ。「仕事、独立したら頑張れよ」と励ましてくださった。傷心旅行風のヨウコさんからはヘネラリフェの庭をめぐりながら人生相談を受ける。皆さん、私とは異なりゆったりとした一人旅だ。

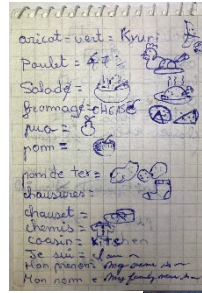


アルハンブラ宮殿/ライオンの中庭

イスラム風情のアルバイシン地区では、各住戸のパティオの扉、その美しい格子のデザインを数十枚の写真に収める。

スペインの仕上げ、マドリッドへ向かう列車に乗り込むとコンパートメントはチェコの女性とダブルブッキング。一瞬、緊張走ったが紳士ぶって席を譲ると部屋は和んだ。マレーシア人、フランス人がいる。廊下に佇むとチェコ女性が気遣って飴玉などをくれる。

そのうち子どもたちが数人、物珍し気に寄ってきたので一緒に遊び始めた。マドリッドから研修?で来ていた中学生たちだ。同伴の教師らは無精ひげの私に警戒するも、彼らマリシヨル、ネスターたちとは国際交流。なんとか通じる英語でスペイン語を教えてくれた。楽しい時間はあっという間に過ぎて、マドリはチャマルティン駅で別れを惜しむ。



腕組みのマリシヨルとネスター(左)たち

マドリッドではプラド美術館の着衣/裸体のマハの絵に衝撃。こんなにでかい絵だったの?! ミロとダリの本を買う。ここは何と一泊でラストのパリへ向かう。

パリでは、ラ・ビレット公園とポンピドーC、オルセー、ルーブル、アラブ世界研、デファンス、サボア邸ほかをじっくり回る。凱旋門、エッフェル塔にも登った。屋根裏部屋のような安ホテルで食べるスーパーで仕入れたサラミソーセージとチーズ、それに数百円の赤ワインがめっちゃ美味い! 早朝の牛乳配達のパンの音。世界中に似たような生活の風景がある。これには何故か元気づけられる。



ルーブル・ピラミッド

パリからロンシャン教会へは夜行の鈍行で向かう。早朝、田舎町のベルフォール駅に降り立つと向こうからニコニコしながら一人の東洋人。こちらが日本人であることをお見通しのように「こんにちは」と声かけやってくる。同業の濱田さん。今は大阪だが3年前までは博多にいたそう。「大坪さん」という構造の女性と仕事した」と言うのでよくよく聞けば私の妻だ。えええええ~!!? 織本匠構造設計研究所でお世話になっていた時の話らしい。地球の裏側の小さな田舎町で! もう驚いたのなんの。

すっかり意気投合し、ロンシャンを一緒に回り、パリへ戻り夕食を共にし、日本でいつかまた会おうと別れた。それから会っていない。

帰国のシャルルドゴール空港で神奈川と大阪からの共にひとり旅のバックパッカーと知り合い、クアラルンプールのトランジットで同宿。何かのついでで来るというので、その年の暮れに博多で3人再会した。お兄ちゃんの私はおもてなしに散財。

旅の終盤、日本へ帰りたくないような、まだ帰りたくないような。独立前の期待と不安で面白い心持ちのひと月でした。いやあ懐かしい。往復の航空券15万円を含み、もろもろ総額で40数万円ほどの軽費旅行、この歳ではもうしきらん。(完)



クアラルンプールのホテルにて